10．文学部

Ⅰ　文学部の教育目的と特徴　・・・・・・・10－２
Ⅱ　分析項目ごとの水準の判断　・・・・・10－４
分析項目Ⅰ　教育の実施体制　・・・・10－４
分析項目Ⅱ　教育内容　・・・・・・・・10－９
分析項目Ⅲ　教育方法　・・・・・・・・10－14
分析項目Ⅳ　学業の成果　・・・・・・・10－18
分析項目Ⅴ　進路・就職の状況　・・・10－20
Ⅲ　質の向上度の判断　・・・・・・・・・・10－23

Ⅰ　文学部の教育目的と特徴

（文学部の教育目的）

1　文学部は、1877 年、東京大学の創立とともに設置されたもっとも伝統ある学部の一つであり、人間の思想、歴史、言語、社会に対する真の理解を目指して、文献読解、資料分析、実験・調査といった基本的な方法論を身につけ、幅広く深い知識を獲得することを通じて、人類文化の継承と発展に寄与しうる人材を育成することを目的として教育を行う。

2　これは東京大学の教育面での中期目標、すなわち「広い視野を有しつつ高度の専門知識と理解力・洞察力・実践力・想像力を兼ね備え、かつ、国際性と開拓者精神を持った、各分野の指導的人材の養成」の一翼を担うものである。

3　この目的を実現するために、前期課程（教養学部）では幅広いリベラル・アーツ教育を行い、特定の専門分野に偏らない総合的な視点を獲得させ、これを基礎として、後期課程（専門学部）では必要不可欠な知識や技能、専門的なものの見方や考え方を身につけさせる。

4　本学部においては人間と文化のあらゆる側面にわたる教育を行う。具体的には、以下のとおりである。

■思想文化：東西にわたる人間観と思想・宗教文化の理解
■歴史文化：各地域における人類の営みの歴史的・文化的理解
■言語文化：古今東西の人類の諸言語と文学的文献の理解
■行動文化：人間と集団の認知、行動と心理、制度をめぐる理解

5　上述の各分野の専門的教育を施すために、本学部には４学科を設け、各学科の下に専修課程を設置している（資料 10－１：東京大学文学部規則（抜粋））。各学科の教育目標は資料 10－２のとおりである。

6　本学部では、学生は進学時に専修課程を選択し、専門課程教育の現場となる研究室に所属する。演習等を中心とする徹底した少人数教育を通じて学問の方法を修得するとともに、自主的に思考し、問題を解決し、その結果を言語化する基本的能力を身につける。

（資料 10－１：東京大学文学部規則（抜粋））

（学科及び専修課程）
第１条の２　本学部に次の４学科を置き、各学科に次の専修課程を設ける。
思想文化学科
哲学、中国思想文化学、インド哲学仏教学、倫理学、宗教学宗教史学、美学芸術学、イスラム学
歴史文化学科
日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学、美術史学
言語文化学科
言語学、日本語日本文学、中国語中国文学、インド語インド文学、英語英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、スラヴ語スラヴ文学、南欧語南欧文学、現代文芸論、西洋古典学
行動文化学科
心理学、社会心理学、社会学

（資料 10－２：学科の教育目標）

学　　科	教　　育　　目　　標
思想文化	人間は古来、みずからの存在の意味を問い、また世界と自己との関係を問うてきた。そのような営みの結果は、さまざまな哲学・思想・宗教といった文化遺産の形をとって存在している。思想文化学科の教育は、西洋、中国、インド、日本、イスラム等の各文化圏にわたって展開された人類の思想文化的遺産を探究し、もって人類普遍の価値の実現に寄与する人材の養成を目的とする。
歴史文化	人間の歴史的な営みは、文書・記録・考古資料・美術品などの形をとって現在に至るまで伝承されている。歴史文化学科の教育は、地球上の各地域に存在するそうした一次史料を正確に理解する能力を鍛錬し、それによって歴史事象についての考察を深め、また歴史を学ぶことを通じて現代の社会・文化に対しても批判力を持ち、新たな文化の創造に貢献する人材の養成を目的とする。
言語文化	人間の思考や認識を支えるものはさまざまな言語システムであり、諸言語によって残された多様な文学的文献は人間をめぐる深い理解を内蔵している。言語文化学科の教育は、諸言語を科学的に考究し、また文学的なテクストの精読を通して人間とその多様な言語文化に関する深い理解と洞察力を涵養し、その知見を生かして社会のさまざまな分野に貢献する人材の養成を目的とする。
行動文化	人間と集団の認知と行動は、心理学的、社会心理学的、社会学的に解明されるべき諸現象を形成する。行動文化学科の教育は、そうした現象を解明するための実験、調査、観察、資料分析等の方法を習得させながら、諸現象と理論的・実証的に取り組むことをつうじて社会や人間を見る目を養い、広い視野をもって人類文化の発展に寄与する、社会的に有為な人材の養成を目的とする。

（文学部の特徴）

7　東京大学では、学生を６つの科類ごとに受け入れ、最初の２年間を前期課程（教養学部）で学び、３年次から後期課程（専門学部）に進学する「進学振分け制度」を実施している。平成 19 年５月１日現在の本学部の学生数は 863 名、そのうち外国人留学生は 13 名である。

［想定する関係者とその期待］

関係者として、①人文・社会科学の学習を目指す学生を想定している。これらの学生は幅広い教養と専門的知識の修得を期待している。②本学部の卒業生を受け入れる一般企業等は、それぞれの現場で指導的役割を担いうる人材を期待している。

Ⅱ　分析項目ごとの水準の判断

分析項目Ⅰ　教育の実施体制

（１）観点ごとの分析

観点　基本的組織の編成

（観点に係る状況）

学生は入学後の２年間を教養学部前期課程教育で学び、３年次から本学部に進学する。本学部では４学科を設置し、各学科には学問分野ごとに専修課程（研究室）を設けている（資料 10－１：東京大学文学部規則（抜粋）、P10－２）。各学科の教育目的は資料 10－２（P10－３）のとおりである。各専修課程は、専門性に応じた適切な教育を実施するために設置され、教育目的に照らして人間と文化のあらゆる側面にわたる教育が可能となるように編成されている。

本学部の教員の配置状況は資料 10－３のとおりである。大学院重点化後、本学部の専任教員全員は大学院人文社会系研究科に所属している。専任教員のうち教授・准教授・講師の１人当たりの学生現員（３・４年生と留年生の合計）は 6.64 人であり、徹底した少人数教育や演習等による充実した個別指導が可能となっている。

専任教員（教授・准教授・講師）の 12.4%が一般企業等（常勤職）での経歴をもち、また 89.1%が東京大学以外の教育研究機関での職歴を有する（資料 10－４：講師以上の教員の経歴）。このことは、応用力をもった知に結びつく教育や研究の活性化に大きく寄与している。なお、助教をふくむ専任教員のうち、女性の割合は 13.4%である。

この他に、学内の他学部・研究所に所属する教員 11 名と、学外の 61 名が教育を担当している（資料 10－５：兼任教員数）。さまざまな分野で実務にあたっている兼担教員は、学生に対して、人文社会系の幅広い基礎的素養の上に、さらに応用展開力を身につけさせるのに貢献している。

（資料10－３：各学科の教員数）

学　科	専　修　課　程	教　授	准教授	講　師	助教等	外国人教師	外国人研究員
思想文化	哲学	4	2	1	1		
	倫理学	4			1		
	宗教学宗教史学	3	1		1		
	美学芸術学	3			1		
	中国思想文化学	2	2		1		
	インド哲学仏教学	4			1		
	イスラム学	1	1		1		
歴史文化	考古学	3			1		
	美術史学	2	1		1		
	日本史学	4	3		1		
	東洋史学	4	2	1	2		
	西洋史学（含：歴史地理）	4	1	1	1		
言語文化	言語学	3	1		1		
	国語学	3	2	1	1		
	国文学	4	1		1		
	中国語中国文学	4			1		
	インド語インド文学	2					
	西洋古典学	1			1		
	英語英米文学	4	2		1	1	
	ドイツ語ドイツ文学	2	1		1	1	
	フランス語フランス文学	2	3		1		
	スラヴ語スラヴ文学	2			1		
	現代文芸論	2			1		1
	南欧語南欧文学	1	1		1	1	
行動文化	心理学	4			2		
	社会心理学	2	1	1	1		
	社会学	5	2		1		
文化資源学研究専攻		3	2		2		1
韓国朝鮮文化研究専攻		3	4		1		1
言語動態学専門分野		2	1		1		
次世代人文学開発センター		1			1		
北海文化研究常呂実習施設			1		1		
死生学寄付講座		①		①			
合計		88 ①	35	5 ①	34	3	3

＊ 教員数は、当該学科等の専任教員数を記入した。○書きは寄付講座教員で外数

（資料10－４：講師以上の教員の経歴）　　(単位:人)　　2007年5月1日現在

経　　歴	教授	准教授	講師	計
①　東大以外の教育研究機関（常勤職	76	31	0	107
②　一般企業等(常勤職)	12	3	1	16
③　①と②の両者	7	1	0	8
④　東大のみ	7	3	4	14
計	88	36	5	129

（資料10－５：兼任教員数）　　(単位:人)　　2007年4月1日現在

所　　属	学　部	大　学　院		共　通
	非常勤講師	非常勤講師	担当（人社主担当）	非常勤講師
研究科（学内）	6	0	0	5
学部（学内）	1	0	0	0
研究所、センター等（学内）	4	0	45	12
他大学（国立大学法人）	19	3	0	17
独立行政法人	0	0	0	0
地方公共団体	0	0	0	0
私立大学、企業等	42	9	0	37

研究所、センター等（学内）の内訳

所　　属	学　部	大　学　院	共　通
	非常勤講師	担当（人社主担当）	非常勤講師
東洋文化研究所	1	13	4
史料編纂所	3	28	4
情報基盤センター	0	1	1
総合研究博物館	0	2	2
留学生センター	0	1	1
合　　計	4	45	12

観点　教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

（観点に係る状況）

本学部が担う人文社会系の学問は、長い歴史があると同時に、近年の発展も著しい分野であり、教育内容もそれをふまえた対応が求められる。そのため、各教員の最新の研究と学界活動などを通じて得た情報等を教育内容に反映させている。教育内容や方法の改善については、教務委員会や各学科長を中心に検討体制を組み、教授会や学科会議等で報告し、周知させている。

新任教員に対しては、本学部の教育理念と体制についての理解を深めるための研修会を着任早々に開催し、学部長が本学部の教育理念についての方針を詳しく解説している。東京大学全学の教育改善活動の動向・成果についても、担当委員が教授会その他で普及を徹底している。

教育内容・方法の改善に向け、教員間での情報交換や経験豊富な先輩教員から情報を効率的に得るために、2006年度から「文化交流茶話会」を年５～６回開催し、多くの参加者を得ている。参加者は、多様な研究分野における多彩な教育・研究経験に関する先駆的情報や苦心話などを共有化して、それぞれの教育の参考としている（資料10－６：文化交流茶話会のトークのテーマと参加者（研究科教職員）数）。2007年11月14日には教育改善講習会（講師：戸田山和久名古屋大学教授）を開催し、教授・准教授98名が参加した（資料10－７：教育改善講習会における戸田山和久名古屋大学教授の講演）。

学生に対する授業改善アンケートの結果を受けた授業改善も、全教員が行っており、学部としてその状況を把握している（分析項目Ⅳの観点「学業の成果に関する学生の評価」を参照）。

（資料 10－６：文化交流茶話会のトークのテーマと参加者（研究科教職員）数）

2006 年度		発 表 者	ト ー ク の テ ー マ	参加者数
5 月 17 日	第 1 回	古井戸 秀夫 小佐野 重利	「歌舞伎とチェコのバロック劇場」 「年金生活の美術愛好家イタリア人に教えられる」	31
6 月 7 日	第 2 回	秋山　聡 平石　貴樹	「聖遺物と美術の密なる関係」 「フォークナーの毀誉褒貶」	29
7 月 5 日	第 3 回	白波瀬佐和子 橋場　弦	「少子高齢化と格差について」 「アテナイ民主政と賄賂の問題」	33
10 月 4 日	第 4 回	大稔　哲也 立花　政夫	「エジプトにおける墓地居住とゴミ再利用について」 「逃げる　- カエルの場合　-」	31
11 月 15 日	第 5 回	唐沢 かおり 赤川　学	「社会を描く心の働き」 「人口減社会に必要なのは滅びの美学」	30
2007 年度		発 表 者	ト ー ク の テ ー マ	参加者数
4 月 25 日	第 6 回	島薗　進	「死生学の 5 年間と今後の展望」	35
5 月 30 日	第 7 回	鈴木　泉 渡部　泰明	「ユーモアとアイロニー　- 笑いをめぐるカテゴリー -」 「骨と皮の和歌」	31
6 月 20 日	第 8 回	野崎　歓 大貫　静夫	「文学のこども　-スタンダールの場合 -」 「『文化のある国』と『文化のない国」 - 東北アジア先史時代の枠組みをめぐって　-」	28
7 月 18 日	第 9 回	宮田　眞治 岸本　美緒	「実験者の<文学>　- リヒテンベルクの場合　-」 「清代の訴状と比較史の課題」	35
10 月 17 日	第 10 回	吉田　光男	「士族と両班 -韓国人における『伝統』と『現代』」	30
2 月 6 日	第 11 回	清水　哲郎	「死の省察／訓練としての哲学 - カシオドルス・イシドルス・アルクィヌス　-」	36

（資料 10－７：教育改善講習会における戸田山和久名古屋大学教授の講演）

「FD をいかに行うか－名古屋大学高等教育研究センターからのご提案」

（2007 年 11 月 14 日開催）

・「教員個々の教授技術向上」路線を疑う
・教授法改善を軽量化し困ったときにすぐ改善できるしかけをつくる
・教員の困惑を解消するための素材を提供する
・草の根 FD のススメ
・Preparing Future Faculty への展開

さらに、教務委員会や各学科長を中心とした検討をふまえて、新しい研究動向に対応する「多分野講義」や原典の徹底的な読解力を養成する講義「原典を読む」、また、文理融合型の 21 世紀 COE プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」、グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」の成果を取り入れた「応用倫理教育プログラム」（資料 10－13：応用倫理教育プログラム履修者等一覧（2004 年度～2007 年度）、P10－12 を参照）や外国語の論文作成発表能力を教育する講義「アカデミック・ライティング」を、全学に対して開いている。「アカデミック・ライティング」では、2007 年度から英語のみでなく中国語・ドイツ語・フランス語の講義も用意し、全学学生の国際的なプレゼンテーション能力の養成・向上をめざしている。

また、本学部進学前の前期課程の学生に対しても、人文社会系専門研究の魅力を紹介し基礎を養成するための入門講義や全学自由ゼミナール授業を提供して、教育の充実に努めている（資料 10－10：前期課程における専門科目の出講一覧（2007 年度）、P10－９）。

さらに、教育改善のための改革を積極的に推進するために、2007年度からは学部長のもとに教育改善検討小委員会を設置し、教務委員会とも連携して、教育方法改善活動を強化している（資料10－８：教育改善検討小委員会の構成及び議事録・抄（2007年度））。

（資料10－８：教育改善検討小委員会の構成及び議事録・抄（2007年度）

教育改善検討小委員会の構成

2007年度

教育改善検討小委員会	丸井　　浩	インド哲学	副研究科長
	小佐野重利	美術史学	副研究科長
	深澤　克己	西洋史学	大学院教務入試制度委員会委員長
	佐藤　健二	社会学	教務委員会委員長
	鈴木　　淳	日本史学	
	唐沢かおり	社会心理学	
	中村　雄祐	言語動態学	
	小林　真理	文化資源学	

教育改善検討小委員会議事録・抄（2007年度）

第２回　11月10日・議事録・抄

議　事

・丸井委員長より、本小委員会設置となった背景、委員会構成、本小委員会のミッションおよび今後の方針について、説明がなされた。
・今後の活動をどうすべきかについて議論がなされ、今年度は、講師を招いて講習会を開催し、人文社会系研究科・文学部の教育改善のあり方を検討するための一つの指針を得る、ということになった。
・講師としては名古屋大学高等教育センター長の戸田山和久教授を第１候補として、丸井委員長が同教授に依頼し、日程等を決めることになった。
・次回の会合は、その講習会の後に開催することとなった。

第３回　11月18日・議事録・抄

議　事

・戸田山和久教授を講師として開催した講習会とその後に行われた教員との議論を踏まえて、今後のＦＤのあり方について討議がなされた。
・これまで人文社会系研究科・文学部で行われてきた活動がそのまま、あるいは促進・強化することによって、ＦＤ活動として十分に機能しうる点もあるが（文化交流茶話会など）、他方、新たに考えていかなければならない問題点のあることも確認された。
・これらの問題は、2008年度、さらに検討を重ねてゆくこととなった。

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）　期待される水準を上回る。

（判断理由）

本学部の基本組織構成・教員組織構成は、多彩な人文社会系の諸学問分野にわたる専門的教育を可能にし、柔軟で応用力に富んだ教育を保証する組織構成になっており、本学部の教育目的によく合致したものになっているといえる。

本学部の教育改善に取り組む体制の特徴としては、新任教員研修・文化交流茶話会・教育改善講習会などの教育改善をめざす機会を積極的に設け、学生に対する授業アンケートを全学科の教員が実施するといった努力とともに、教務委員会を通じて人文社会系諸学の新動向等を踏まえた迅速かつ時宜に適った教育内容・方法の改善を行っていることなどが指摘できる。さらに、持続的な改善をめざして、教育改善検討小委員会を設置している。教育の実施体制としては、関係者の期待に十二分に応えた水準にあるといえる。

分析項目Ⅱ　教育内容

（１）観点ごとの分析

観点　教育課程の編成

（観点に係る状況）

前期課程からの進学振分けに際して、本学部は主に指定科類である文科三類からの進学者を受け入れている。進学後は外国語の高い運用能力が求められるため、文科三類では全学期にわたる第二外国語の履修が可能となるよう配慮している（資料 10－9：初修外国語の単位数と履修方法）。

また、後期課程への円滑な移行を図るとともに、本学部の教育目的である人間と文化の本質について一定の理解が得られるよう､前期課程の第３･４学期に本学部教員が出講し、多くの科目を開講し、それらの科目を積極的に履修するよう求めている（資料 10－10：前期課程における専門科目の出講一覧（2007 年度））。

（資料 10－９：初修外国語の単位数と履修方法）

		列	1	2	3	4	（学期）
文科三類生は必修 16 単位（１コマ２単位）であり、第１・２学期に各３コマ(一列・二列・演習）、第３・４学期に各１コマ(二列)を履修する。	文科三類生	一	○	○			
		二	○	○	○	○	
		演習	○	○			

（資料 10－10：前期課程における専門科目の出講一覧（2007 年度））

専修課程等	担当教員	科目名	学期	曜日	時限	開講
哲学	髙山 守	哲学演習Ⅱ	冬	水	2	本郷
中思文	川原 秀城	中国思想文化学概論Ⅱ	冬	金	3	本郷
宗教	池澤 優	宗教学概論	教養 4	金	3	駒場
倫理	熊野 純彦	倫理学特殊講義	教養 3	月	5	駒場
美学	西村 清和	原典講読	冬	木	3	本郷
	渡辺 裕	原典講読（Ⅱ）	冬	木	2	本郷
	渡辺 裕	美学芸術学特殊講義(Ⅱ)	冬	木	4	本郷
	渡辺 裕	美学芸術学特殊講義（Ⅲ）	教養 3	水	2	駒場
	小田部 胤久	美学概論	冬	月	3	本郷
	小田部 胤久	原典講読	冬	月	4	本郷
	安西 信一	原典講読	冬	金	4	本郷
	神山 彰	美学芸術学特殊講義	夏	水	2	本郷
	武田 潔	美学芸術学特殊講義	夏	月	4	本郷
	坂牛 卓	美学芸術学特殊講義	夏	金	1	本郷
ｲｽﾗﾑ	竹下 政孝	ｲｽﾗﾑ学概論（II)	冬	月	3	本郷
歴史共通	深沢 克己	史学概論	教養 4	木	3	駒場
日本史	村井 章介／大津 透	日本史学特殊講義	教養 3	月	2	駒場
	藤田 覚／鈴木 淳	日本史学特殊講義	教養 4	木	5	駒場
東洋史	蔀 勇造 他	東洋史学特殊講義	教養 3	木	4	駒場
	吉澤 誠一郎 他	東洋史学研究入門	教養 4	木	4	駒場
西洋史	深沢 克己	西洋史学研究入門	教養 4	木	2	駒場
考古学	大貫 静夫 他	考古学概論Ⅰ	教養 4	月	2	駒場
	近藤 修	人類学概論	教養 4	月	5	駒場

言　語	熊本　裕	言語学概論(I)	夏	水	2	本郷
	林　徹	言語学概論(I)	冬	金	3	本郷
	西村　義樹	言語学概論(II)	冬	水	2	本郷
国　語	月本　雅幸	国語学特殊講義（Ⅱ）	教養 4	金	5	駒場
国　文	渡部　泰明	国文学概論	教養 4	金	5	駒場
	長島　弘明	国文学特殊講義	教養 4	木	2	駒場
中　文	木村　英樹	中国語学概論	夏	木	5	本郷
	藤井　省三	中国文学史概説	教養 3	木	4	駒場
英　文	今西　典子	英語学入門	冬	木	4	本郷
	阿部　公彦	英文学入門	冬	木	5	本郷
独　文	宮田　眞治	ﾄﾞｲﾂ語学ﾄﾞｲﾂ文学演習(II)	教養 4	木	5	駒場
仏　文	塩川　徹也	ﾌﾗﾝｽ文学史概説	教養 4	月	3	駒場
	塚本　昌則	ﾌﾗﾝｽ文学史概説	冬	金	3	本郷
南欧文	浦　一章	ｲﾀﾘｱ語学ｲﾀﾘｱ文学特殊講義	教養 4	金	5	駒場
ｽﾗｳﾞ	金沢　美知子	ｽﾗｳﾞ文学史概説	冬	火	2	本郷
現代文芸論	柴田　元幸	現代文芸論概説	冬	月	5	本郷
西　古	逸身　喜一郎	西洋古典学特殊講義(II)	教養 4	木	4	駒場
心　理	立花　政夫･佐藤　隆夫･高野陽太郎･横澤　一彦	心理学実験演習(I)	冬	木	3,4	本郷
	高野　陽太郎	心理学研究法	教養 4	金	3	駒場
	南風原　朝和	心理学特殊講義	教養 4	金	2	駒場
	長谷川　寿一	心理学特殊講義	教養 4	水	5	駒場
社会心理	唐沢　かおり	社会心理学実験実習Ⅰ	冬	木	3,4	本郷
	馬場　康維	社会心理学調査実習Ⅰ	冬	木	2	本郷
	南風原　朝和	社会心理学統計　Ⅰ	教養 4	金	2	駒場
	高野　陽太郎	心理学研究法	教養 4	金	3	駒場
社会学	武川　正吾　他	社会学概論	教養 4	月	1,2	駒場
	盛山　和夫　他	社会学史概説	冬	金	3,4	本郷

本学部の後期課程カリキュラムは、学科及び専修課程ごとに編成しているが、随時、教務委員会を通じて学科及び専修課程間の全体的な調整を行っている。

必修科目、選択科目の構成は、学科及び専修課程ごとに異なるが、単位数で見るとほぼ半々になっている（別添資料 10－１：文学部卒業要件一覧、P10－25）。多くの専修課程で、前期課程２年次第４学期～後期課程３年次に「宗教学概論」「史学概論」「国文学概論」「心理学実験演習」などの基礎的な概論・概説科目、実験科目を配して必修科目として履修させ､さらに､演習や特殊講義の履修を通じて専門的な学識の涵養を図るとともに、４年次においては、卒業論文・特別演習指導の科目を置き、卒業論文作成（一部特別演習）に至るまでの学習が体系的に行われるよう配慮している。演習は、少人数教育に重点を置く本学部が最も重視する科目であり、３、４年次の全学期にわたる履修を義務づけるとともに、専任教員の担当としている。

また、上記の専修課程ごとに開講される科目以外にも「一般講義」、「多分野講義」、「アカデミック・ライティング」、「原典を読む」、「応用倫理教育プログラム」、「文化環境学」などの共通科目を置き、専門性に偏ることのない幅広い知識・技能・教養が修得できるよう配慮している。

観点　学生や社会からの要請への対応

（観点に係る状況）

本学部の卒業生は、幅広い教養を身に付け、様々な分野において指導的な役割を担うことが社会的に要請されている。そのため、必修科目の充実を図るのみならず、選択科目履

修の自由度を高め、他専修課程、他学科、さらには他学部の科目履修が容易となるように配慮している。一方、他学部学生の履修に対しても門戸を開き、開講科目名を文学部ウェブサイトで公開するとともに、授業内容を冊子体で公表し、履修の便を図っている。他学部学生の履修者は相当数に及んでいる（資料 10－11：履修状況一覧（2004 年度～2007 年度）、資料 10－12：履修状況一覧（抜粋））。「原典を読む」のように、本学部の学問の基礎であるテクスト精読の方法を、他学部学生に体得させる科目も開講している。

（資料10－11：履修状況一覧（2004年度～2007年度））

年度	講義区分	文　学　部		人文社会系研究科		他学部		他研究科	
		履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者
2004	概論・概説	2,380	1,279	53	36	1,180	644	50	19
	講義	11,145	5,067	278	147	2,036	966	165	86
	演習	2,084	1,632	137	103	108	76	17	13
	実験･実習	192	162	6	3	60	53	2	2
	外国語	623	356	49	26	275	170	100	56
2005	概論･概説	2,140	1,056	46	32	1,054	596	34	17
	講義	10,800	5,238	183	108	2,030	1,004	108	54
	演習	2,112	1,687	119	95	106	69	22	15
	実験･実習	161	145	9	8	68	60	2	1
	外国語	799	449	42	33	314	178	64	39
2006	概論･概説	1,937	1,112	60	35	837	497	46	23
	講義	11,232	5,457	227	147	2,255	1,072	147	78
	演習	2,041	1,611	116	95	127	79	24	16
	実験・実習	237	159	7	7	62	35	3	1
	外国語	600	345	65	52	309	173	64	42
2007	概論･概説	2,291	1,244	59	39	477	232	46	27
	講義	10,232	4,905	220	132	1,837	725	185	78
	演習	2,039	1,563	99	73	90	59	25	13
	実験・実習	240	223	6	4	9	2	2	1
	外国語	644	373	72	46	297	195	98	55

（資料10－12：履修状況一覧（抜粋））

年度	科　　目	文学部		人文社会系研究科		他学部		他研究科	
		履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者	履修者	取得者
2004	死生学	231	93	0	0	18	4	0	0
	デジタルメディア	372	184	1	0	113	35	2	1
2005	文化環境学	133	38	0	0	19	4	2	2
	死生学	65	33	0	0	10	4	0	0
	デジタルメディア	296	165	1	1	67	34	2	2
2006	文化環境学	137	47	2	2	9	3	3	1
	死生学	40	23	1	0	11	11	0	0
	デジタルメディア	233	89	1	1	91	56	5	4
2007	文化環境学	99	38	0	0	14	3	2	1
	死生学	216	71	0	0	14	6	2	0
	デジタルメディア	316	153	1	1	96	60	4	2

伝統的な教育体制を重視しつつ、学生や社会からの今日的な要請に応えるように積極的な努力を行っている。新しい研究動向に対応する専門横断型の「多分野講義」の開講、旧来の各国語別・縦割りの理念に拠らない「現代文芸論」専修課程の設置、また文理融合の理念に基づく「応用倫理教育プログラム」「文化環境学」「死生学」等の授業科目の開講

は、その現れである。「応用倫理教育プログラム」は大学院共通科目ではあるが、学部学生の受講がきわめて多く、学生の要望に即した授業科目であることが裏づけられる（資料10－13：応用倫理教育プログラム履修者等一覧（2004年度～2007年度））。また、本学部の卒業生は海外で活躍する機会も多く、国際的なプレゼンテーション能力の養成・向上をめざすべく、2007年度からは英語に加え、中国語・ドイツ語・フランス語を対象とした「アカデミック・ライティング」を開講している。実践的な情報処理能力の涵養も目指し、「情報メディア論」「電算機応用」などのプログラミングやデジタルメディア教育にも力を入れている。卒業生の就職先への聞き取り調査からも、その成果が高く評価されていることがわかる（資料10－26：卒業生就職先聞き取り事例、P10－21）。

また、本学部進学前の前期課程の学生に対しても、人文社会系専門研究の魅力を紹介し基礎を養成するための入門講義や全学自由ゼミナール授業を開講して、教育の充実に努めている（資料10－10：前期課程における専門科目の出講一覧（2007年度）、P10－９参照）。

（資料10－13：応用倫理教育プログラム履修者等一覧（2004年度～2007年度））

年度	科目番号	授業科目名	担当教員	学期	履修者数				単位取得者数			
					文	人文	他学部・他研究科	計	文	人文	他学部・他研究科	計
2004	45901	応用倫理入門	熊野	夏	84	0	59	143	25	0	20	45
	45902	生命倫理特殊講義	樋野	冬	61	0	12	73	19	0	2	21
	45903	生命倫理特殊講義	カール	夏	63	0	11	74	10	0	1	11
	45904	生命倫理特殊講義	甲斐	夏	6	0	0	6	6	0	0	6
	45905	環境倫理特殊講義	内山	夏	190	0	32	222	108	0	14	122
	45906	環境倫理特殊講義	鬼頭	冬	118	0	9	127	34	0	5	39
	45907	現代倫理特殊講義	土屋	夏	74	0	1	75	22	0	0	22
	45908	現代倫理特殊講義	上野	冬	27	0	4	31	9	0	3	12
	45909	応用倫理研究Ⅰ	森下	冬	32	0	1	33	8	0	0	8
	45910	応用倫理研究Ⅰ	小松	夏	11	0	2	13	10	0	1	11
	45911	応用倫理研究Ⅰ	一ノ瀬	夏	50	0	5	55	28	0	2	30
	45912	応用倫理研究Ⅱ	池澤	冬	25	0	5	30	19	0	4	23
	45913	応用倫理研究Ⅲ	竹内	通年	112	3	12	127	40	2	6	48
	45914	応用倫理研究Ⅲ	松永	夏	110	2	17	129	10	0	4	14
2005	55901	応用倫理入門	熊野	夏	80	0	25	105	32	0	7	39
	55902	生命倫理特殊講義	野口	冬	8	0	3	11	2	0	1	3
	55903	生命倫理特殊講義	赤林	夏	4	0	0	4	3	0	0	3
	55904	生命倫理特殊講義	中岡	夏	107	0	24	131	21	0	4	25
	55905	環境倫理特殊講義	内山	夏	162	0	96	258	104	0	55	159
	55906	環境倫理特殊講義	鬼頭	夏	30	1	5	36	8	1	2	11
	55907	現代倫理特殊講義	井崎	夏	90	0	20	110	27	0	9	36
	55908	現代倫理特殊講義	金井	冬	48	0	12	60	18	0	4	22
	55909	応用倫理研究Ⅰ	一ノ瀬	夏	72	1	27	100	25	0	15	40
	55910	応用倫理研究Ⅰ	島薗	夏	25	0	1	26	7	0	0	7
	55911	応用倫理研究Ⅱ	小松	夏	9	0	0	9	6	0	0	6
	55912	応用倫理研究Ⅱ	熊野	夏	5	0	0	5	3	0	0	3
	55913	応用倫理研究Ⅲ	竹内	通年	122	2	17	141	45	1	3	49
	55914	応用倫理研究Ⅲ	松永	冬	75	2	16	93	13	1	1	15

年度	科目番号	授業科目名	担当教員	学期	履修者数				単位取得者数			
					文	人文	他学部・他研究科	計	文	人文	他学部・他研究科	計
2006	65901	応用倫理入門	熊野	夏	73	0	22	95	12	0	4	16
	65902	生命倫理特殊講義	岡本	夏	124	0	23	147	51	0	4	55
	65903	生命倫理特殊講義	赤林	夏	6	0	1	7	2	0	0	2
	65904	生命倫理特殊講義	品川	冬	48	0	12	60	16	0	2	18
	65905	環境倫理特殊講義	内山	夏	216	0	56	272	138	0	28	166
	65906	環境倫理特殊講義	鬼頭	夏	9	0	5	14	4	0	2	6
	65907	現代倫理特殊講義	井崎	夏	60	0	15	75	23	0	3	26
	65908	現代倫理特殊講義	金井	夏	38	0	10	48	17	0	4	21
	65909	応用倫理研究Ⅰ	一ノ瀬	夏	56	0	15	71	28	0	1	29
	65910	応用倫理研究Ⅰ	池澤	冬	33	0	3	36	19	0	3	22
	65911	応用倫理研究Ⅱ	小松	夏	24	0	10	34	8	0	4	12
	65912	応用倫理研究Ⅱ	斎藤	冬	20	0	2	22	9	0	2	11
	65913	応用倫理研究Ⅲ	竹内	通年	99	1	11	111	21	1	1	23
	65914	応用倫理研究Ⅲ	松永	冬	85	0	21	106	18	0	4	22
2007	75901	応用倫理入門	熊野	夏	44	0	23	67	8	0	8	16
	75902	生命倫理特殊講義	岡本	夏	54	0	7	61	3	0	2	5
	75903	生命倫理特殊講義	香川	夏	102	0	9	111	39	0	5	44
	75904	生命倫理特殊講義	赤林	冬	2	0	0	2	1	0	0	1
	75905	環境倫理特殊講義	内山	夏	149	0	94	243	90	0	50	140
	75906	環境倫理特殊講義	鬼頭	夏	10	0	7	17	4	0	4	8
	75907	現代倫理特殊講義	丸田	夏	140	0	25	165	61	0	12	73
	75908	現代倫理特殊講義	上野	夏	16	0	7	23	4	0	4	8
	75909	応用倫理研究Ⅰ	小松	夏	15	0	1	16	3	0	1	4
	75910	応用倫理研究Ⅰ	斉藤	冬	43	2	4	49	11	1	1	13
	75911	応用倫理研究Ⅱ	一ノ瀬	夏	77	3	30	110	43	2	8	53
	75912	応用倫理研究Ⅱ	池澤	冬	63	1	4	68	22	1	4	27
	75913	応用倫理研究Ⅲ	竹内	通年	61	4	5	70	19	0	1	20
	75914	応用倫理研究Ⅲ	松永	冬	88	6	46	140	18	2	4	24

本学部は、教職志望者の要請にも積極的に対応している。教育学部との連携により、教職科目の弾力的な履修が可能になるような工夫を行っている。教育実習の単位取得者数は毎年相当数に上り、大学院進学後、非常勤も含め、中・高等学校の教壇に立つ者も少なくない（資料 10－14：教育実習単位取得者数（年度別））。

（資料 10－14：教育実習単位取得者数（年度別））

年　度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
人　数	30	40	31	26

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

本学部の教育課程の編成は、専修課程ごとに基礎科目から高度な専門科目までの履修が円滑に進むように充分な配慮がなされており、同時にまた幅広い教養を身につけることができるよう他専修課程や他学部の履修を可能にするとともに、多分野にわたる専門横断型の授業科目や「応用倫理」のように学生や社会の今日的要求に応えることのできる授業科目を適切に配置している。「アカデミック・ライティング」のように、国際化の動向にあわせた実践的な授業科目も設置している。卒業生の就職先への聞き取り調査などによっても、本学部の教育内容が高い評価を得ていることが確かめられる。以上の点から、教育目的に対して期待される水準を上回っていると判断される。

分析項目III　教育方法
（１）観点ごとの分析

観点　授業形態の組合せと学習指導法の工夫

（観点に係る状況）

本学部の授業形態は、主として講義、演習、卒業論文・特別演習指導の３種からなる。行動文化学科及び考古学専修課程では、実験・実習・調査が開講されているが、これらを演習に含めると、本学部全体の科目数のうち、講義が 66%、演習が 27%、卒業論文・特別演習指導が７％である（2007 年度）。平均的な履修者の場合もほぼ同じ割合になる。また、専修課程ごとに卒業に必要な単位数を科目の種類別に設定し（別添資料 10－１：文学部卒業要件一覧、P10－25）、バランスのとれた学習が可能になるよう配慮している。

これらの授業の中には、少人数授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に活用する授業など、学習指導上の工夫をこらしたものが多い。特に専修課程ごとに必修科目として課される演習は、徹底した少人数教育であって、主体的な学習態度を涵養する場となっている（資料 10－15：少人数授業の長所を活かした演習の例（哲学））。少人数授業（演習）と通常の講義のクラスサイズの違いを示すために、資料 10－16 に講義と演習の履修者数を示す。また、考古学、美術史などフィールドワークが有効な分野では、学外での実習を行うことで、学習意欲を高め、実践的な知識と経験が得られるように配慮している（資料 10－17：フィールド型授業の例（美術史））。

（資料 10－15：少人数授業の長所を活かした演習の例（哲学））

2008 年 2 月 12 日担当教授へのインタビュー

科目名　哲学演習Ｉ「Kant: Prolegomena」　高山 守 教授

私の演習では、各回の議論が、その場限りでのものにならないように、毎回演習記録（プロトコル）を作成している。作成するのは参加している学生諸君だが、一人が二回続けて作成する。そして、このプロトコル作成者（プロトコラント）は、その後の三回目に訳読を担当し、これをまた二回続ける。この二回については、別の人がプロトコラントとなり、この人が、その三回目から、また二回続けて訳読を担当する。こうして、一人がプロトコル作成を二回、訳読を二回、計四回（四週）にわたり担当者となり、毎回の演習には、この訳読者とプロトコラントという二人の担当者が、特別の役割を担って参加する。

私の演習は、いずれもドイツ語講読なので、訳読の担当もなかなか大変なのだが、授業の記録をとるということも劣らず大変な作業で、プロトコルのまとめと訳読の準備とが重なる、そのつどの第二回目（プロトコラント）終了から第三回目（第一回の訳読）が始まる週の担当者の負担は相当に重い。

プロトコルは、前回の演習の分が、毎回演習のはじめに読み上げられるが、これによって、前回の繋がりがかなりの程度確認できて、当日の分に入りやすい。そのつどの記録が積み重なっていく充実感も、ある。

（資料 10－16：講義と演習のクラスサイズの違い（2007 年度　日本史学専修課程の例））

教員名	科目名	履修者数	教員名	科目名	履修者数
村井　章介	日本史学特殊講義	56	野島(加藤)陽子	日本史学特殊講義	127
	古文書学特殊講義	39		日本史学演習	30
	日本史学演習	15	大津　透	日本史学特殊講義	11
藤田　覚	日本史学特殊講義	49		日本史学演習	7
	日本史学演習	20	鈴木　淳	日本史学特殊講義	45
佐藤　信	日本史学特殊講義	48		日本史学演習	25
	日本史学演習	8			

（資料 10－17：フィールド型授業の例（美術史））

2008 年 2 月 12 日担当教授へのインタビュー

科目名　美術史学演習「美術史作品研究」　佐藤康宏 教授　他

美術史学では、実際の美術作品を観察し、それについて調査し考えることが重要ですので、そのための訓練となるような授業を設けています。受講者は美術史学専攻の大学院生と学部学生に限定し、内容は実質的には演習です。この授業は、参加者全員で出かける美術品の見学旅行を中心とし、その準備と、旅行後の総括とから成り立っています。

旅行は、多くの場合、京都、奈良、大阪、兵庫など関西にある古社寺や博物館・美術館を目的地としますが、西洋美術の特別展が加わることもありますし、また、これまでには東北地方や台湾、韓国に行ったこともあります。たいていは夏学期、４泊５日程度の日程で実施し、この間、美術史学関係のほかの授業は休講とします。まれに冬学期になることもあり、また日程にも増減があります。

担当教員の助言に基づいて大学院生が計画を立て、あらかじめ重点的に見学する作品を十数点選び出します。学部３年生が主体で関心のあるものを選び、演習の時間を利用して下調べをし、パンフレットを作成して出かけます。現地では作品を前に担当者が簡潔な説明をして、ほかの参加者からの質問や補足説明を受け、帰京後各自が新たにレポートを書きます。

３年生にとっては何か特定の作品について調べるという最初の機会であり、その過程で学ぶことも多くありますが、特に現地で、想像していた作品と実物との違いに強い印象を受けたり、教員からの指摘に研究の厳しさを感じたりといった体験となるのが通例のようです。この折に選択した作品が卒業論文の主題となる場合もあります。総じて受講者からは有意義であったという感想が述べられています。

教員に加えて、演習、実験などを中心にティーチング・アシスタント（TA）を適宜配置している（資料 10－18：TA 採用実績）。TA は大学院人文社会系研究科の学生であり、全員が TA として不可欠な専門的知識と経験を備えている。

（資料 10－18：TA 採用実績）

年　度	TA 採用数
2004 年度	97
2005 年度	89
2006 年度	92
2007 年度	86

学生に配付される授業内容の冊子体には、担当教員名、授業内容、授業における目標、教科書・参考書の指示、成績評価の方法などが掲載されており、学習の便宜が図られている（資料 10－19：授業内容記載例（2007 年度））。

（資料 10－19：授業内容記載例（2007 年度））

科目名　音声学			
担当教員　　上野　善道	学期：通年	4 単位	曜日・時限：火・３

音声を正しく聞き取って書き取り、かつそれを発音できるようでなければ、未知の言語・方言の研究は一歩も進まないと言っても過言ではない。英語や日本語などのよく知られている言語でも、音声学を身につけていないと事実をきちんと観察できないものである。この授業では、音声につきその理論的な理解にとどまらず、実践的な理解をも得ることを狙いとし、具体的な目標を「国際音声字母」が使いこなせるようになることにおく。このため、通常の授業とはかなり異なる形態のものとなる。聞き取りと発音は毎時間当てられるものと思ってほしい。また、若いときほどマスターしやすいので、言語学専修課程の学生はできるだけ３年次に取ること。

テキストは、風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学』第２版、東大出版会、2004（初版ではなく、第２版の３刷以降を用意）、および服部四郎『音声学』（岩波書店）を用いる。『言語学』は生協で各自購入。『音声学』絶版なので別に考える。

評価は、試験（筆記、聞き取り、発音を含む）により行なう。

観点　主体的な学習を促す取組

（観点に係る状況）

主体的な学習を促すために、まず適切な履修科目を自主的に選択できるよう、授業の内容等を周知させる努力をさまざまな形で行っている。

本学部では、進学前に２度（１年次と２年次）、進学直後（３年次の４月）に１度、ガイダンスを行い、さらに卒業論文を執筆するためのガイダンスも行っている（資料 10－20：進学ガイダンス（2007 年度））。進学前のガイダンスは、本学部の特色を理解させ、教養課程在学中にすでに本学部進学後に必要な勉学の準備をさせるという意味において、主体的な学習を促す取組の一つになる。進学直後に行なわれるガイダンスは、履修方法と注意事項、望ましい学習のありかたを周知させる重要な場になっている。

（資料 10－20：進学ガイダンス（2007 年度））

（出典：文学部ウェブサイト）

進学生は、助教及び大学院学生も含めた在学生から、履修計画、図書や研究施設の利用などあらゆる面で指導を受け、それに基づいて学習計画を自主的に立てられるようになっている。学習のための有益な情報は、文学部や専修課程のウェブサイトなどからも得られる（資料 10－21：ウェブサイト例（社会学））。

その他、文学部３号館図書室の開室時間を午後９時までとし、学生の主体的学習を促す努力を行っている。蔵書冊数は約 95 万冊、利用実績は学部・大学院の学生を合わせて年間入館者数は 41,810 人、貸出冊数は 18,971 冊であり（2006 年度）、学生の要求に充分応えるものとなっている。

（資料 10－21：ウェブサイト例（社会学））

東京大学大学院人文社会系研究科　東京大学文学部

社会学研究室

開室時間(事務・図書業務)：月曜～金曜　10:00～17:00
場所：東京大学本郷キャンパス法文2号館1階(銀杏並木側)

◀TOP　研究室案内　教員紹介　授業紹介　大学院　図書利用　連絡先　入試関係　同窓会　研究会案内　リンク

研究室案内

●研究室

銀杏並木に面した法文2号館の1階に社会学の研究室がある。地階にはコピー・センター、アーケード側を出ると学部事務室や生協が近く、地の利はすこぶるよい。中は4つのブロックに分かれていて、その一つが学部生用の読書室になっている。初夏にはまばゆい緑、晩秋にはあざやかな黄が窓の外をかざる。壁の書架に並んでいる古くからの図書の背表紙が部屋をとり囲み、まん中は、大きなテーブルが主のように占拠している。雑然とした賑やかさは、多様な研究領域をかかえる社会学を象徴しているのかもしれない。いかにも往時の学生の勉強部屋といった感じのこの部屋は、昔から学生同士のさまざまなコミュニケーションの広場として活用されてきており、学部生による自主的な研究会や勉強会が頻繁に開かれている。情報基盤センターの端末をはじめ、ネットワーク・コミュニケーションも盛んになっている。

文学部最大の170名以上もの学生・院生をかかえる社会学にとって、研究室は貴重な共同空間であり、外国語図書、雑誌、資料が置かれているほか、事務連絡、教材とゼミ報告資料のコピー、端末操作、情報交換など、さまざまな活動の結節点となっている。この共同研究室を中心にして、その周辺(同一階、地階、向かいの法文1号館4階)にいくつかの調査室、機器室、そして教官室が存在する。

社会という現象は悠久の昔から現在にいたるまで、人間の生活するすべての空間において存在してきた。かつて、社会学という学問が19世紀西欧社会において台頭してきた時代、コントやスペンサーやマルクスは、「近代社会とはなにか」という問いに答えようとする営為のなかで、包括的で一般的な総合的社会理論をめざした。さすがに今日では、かれらの理論がそのまま保持される状況にはない。しかも、通常の社会学研究の営みは、より特定的で限定された対象領域におのずから専門分化せざるをえなくなっている。とはいえ、社会学は今でもそうした個々の経験的研究を通じてつねに「社会とはなにか」「社会と個人とのよりよい関係はどういうものか」という基本問題への現実的な関心に貫かれている。建物は古いけれども、研究室の中はそうしたいつまでも若々しいテーマが息づいている。

●学部の講義

現代において社会学の研究領域は、家族、組織、農村、都市、国家、国民社会、国際社会という社会集団の類型による区分、教育、社会福祉・医療、政治、法、経済、社会階層、産業・労働、社会運動、社会思想、社会意識、という現象の特性に基づく区分などによって個別的に分かれている。さらにまた、ミクロ自我論、行為論、マクロ・システム論、歴史社会学、社会変動論、研究法として計量社会学、社会調査法などの領域も存在する。その中で東大

（出典：文学部ウェブサイト）

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

授業形態の組み合わせについては、講義の他に演習の履修は必須であるが、専門的な科目と学生個々人の幅広い関心に応じて個性をのばすことのできる多様な科目を提供しており、適切である。また、演習を中心とする少人数授業、フィールド型授業、メディアを駆使した授業など学習指導上の工夫をこらしている。これによって、本学部の授業構成は、本学部の教育目標に十二分に対応している。

また、学生の主体的な学習を支援するための情報提供と指導を、専修課程として、また各教員、TA、大学院学生・学部上級生それぞれの立場から効果的に行っており、きめ細かな指導体制が構築されている。

以上のことから、本学部の教育方法は、学生によって期待される水準を上回るといえる。

分析項目Ⅳ　学業の成果

（１）観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

本学部では、専門科目について 84 単位の修得を卒業要件とする。各年度とも卒業生は平均して 92 単位以上を取得しており、これは教育課程の設計意図に合致しているだけでなく、本学部の授業が学習意欲を高めているためと考えられる（資料 10－22：卒業までの在籍年数・平均取得単位及び退学率）。

（資料 10－22：卒業までの在籍年数・平均取得単位及び退学率）

	2004 年度			2005 年度			2006 年度			2007 年度		
卒業までの在籍年数と人数	2 年	3 年	4 年～	2 年	3 年	4 年～	2 年	3 年	4 年～	2 年	3 年	4 年～
	198	112	37	224	86	24	215	77	29	208	80	17
卒業生の平均取得単位数	93.7			92.9			90.2			92.6		
学生の退学率（数）	1.6%（14）			1.9%（17）			2.6%（22）			2.3%(20)		

※　卒業までの年数は、前期課程からの進学者が対象。学士入学、再入学、転学部を除く。
※　平均取得単位数は「卒業までの年数」欄に該当した者の取得単位数を合計し、人数で割ったもの。小数点第２位以下は四捨五入。
※　学生の退学率について：退学者は依願退学及び命令退学した者。退学率は退学者を当該年度４月１日現在の学生数で割ったもの。小数点第２位以下は四捨五入。

前期課程から本学部に進学した者のうち、２年で卒業する者の比率は、2004 年度に 57%であったが、2007 年度は 68%に上昇した。退学した者の比率は、2004 年度の 1.6%から 2007 年度の 2.3%へと漸増傾向にあるが、退学理由を詳細に見ると、学業不振者の数には大きな変化はなく、主に健康上の理由と進路変更による退学が増加したためである（資料 10－23：退学理由）。

（資料 10－23：退学理由）

理　由	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
経 済 上	4	4	4	2
健 康 上	2	2	5	3
進路変更	1	1	2	6
学業不振	7	9	7	8
そ の 他	0	1	4	1
合　計	14	17	22	20

卒業論文の学術的水準は大変に高い。たとえば、全国の大学から日本史関係の地方史にかかわる優秀な卒業論文が選ばれて地方史研究協議会主催の「卒業論文発表会」（2007 年で第 48 回）で報告されているが、本学部の複数の卒業論文が研究者から高い評価を得ている。資料 10－24 は、学会誌『地方史研究』に掲載された研究者による評価である。

また、卒業論文以外でも高い社会的な評価を得るような実績を残す学生も多い。例えば、ある学生は「これでいいのだ！スタートラインの国語」という企画によって第一回出版甲子園グランプリを受賞し、その企画は 2006 年 9 月にダイヤモンド社から「東大生が書いた『国語』のことを感動的に好きになる本」として出版された。教育実習の単位取得者数は毎年相当数に上る。中学・高等学校の教壇に立つ者は卒業直後（資料 10－25：卒業生進路状況、P10－20）のみならず、卒業後数年を経てからもしばしばある。

（資料 10－24：地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」に選ばれた東京大学卒業生の報告・評価一覧）

発　表 年月日	年次及び 開催場所	氏　名	卒業論文の題名	評　　価
2004.4.17	第 45 回 明治大学	澤　晶裕	「日本古代の国史と軍事－元慶の乱における国司の軍事指揮権」	「手堅い内容」（『地方史研究』310 号）
2005.4.16	第 46 回 駒澤大学	小林延人	「地方における太政官札流通とその意義」	「新たな発見であったとともにその論点に独自性」（『地方史研究』316 号）
2006.4.22	第 47 回 國學院大學	渡辺拓也	「近世の『領』と地域秩序－西牧領の名主と百姓」	「地道に名主家の文書を読んだもので、一つ一つの事例が非常に具体的…興味深かった」（『地方史研究』322 号）
2007.4.21	第 48 回 駒澤大学	十河靖晃	「中近世移行期毛利氏における家臣団編制－中央権力との関係から－」	「戦国期の政治交渉を考える上で興味深い事例」（『地方史研究』328 号）

観点　学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

直近（2005 年）の学部生を対象とした全学学生生活実態調査のうち、カリキュラムに関する評価では、本学部学生の 67.6%が「満足」あるいは「まあ満足している」と回答した。また、カリキュラムの消化が「できる」あるいは「まあまあできる」と回答したものは、85.9%に達した。さらに、2007 年度の卒業生に本学部独自にアンケート調査を行ったところ、81.9%が「本学部での教育に満足している」、16.3%が「どちらともいえない」と回答した。「不満があった」と回答した者は僅か 2.3%であった。

本学部では 2001 年度より専任教員による授業改善のためのアンケートを行い、授業の改善に努めてきた。たとえば、ディスカッションの時間を設定したり、事前に電子メールによってディスカッションしたい内容を書き込むことによって、授業における議論への参加を促したりしている。こうした地道な努力の成果が上記の結果に現れているものと思われる。

（２）分析項目の水準及びその判断理由

(水準)　期待される水準を上回る。

(判断理由)

卒業生の単位取得状況は、教育課程の単位履修設計に即しつつ、取得単位総数は一貫して卒業のために必要な最低限の単位数を大幅に上回っている。これは授業の質が高く、学生の期待する水準を十二分に満たしているためであると考えられる。事実、全学学生生活実態調査及び本学部独自のアンケート調査の結果は、学生の満足度が高いことを示している。

これらのことから、学業の成果は、関係者である学生から期待される水準を上回っているといえる。

分析項目Ⅴ　進路・就職の状況

（１）観点ごとの分析

観点　卒業（修了）後の進路の状況

（観点に係る状況）

本学部卒業生の 30%弱が進学し、そのほとんどが大学院で勉学を続ける。就職者の比率はこの数年間で 50%弱から 65%へと上向いており、これは社会状況の変化によると思われる。就職先は民間企業から官公庁まで広い範囲に及ぶが、採用数の少ない出版・新聞・放送等の分野にコンスタントに卒業生を送りだしていることは特筆できる（資料 10－25：卒業生進路状況）。

（資料10－25：卒業生進路状況）

		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
進学者内訳	大学院	91	93	76	102
	大学学部	4	2	2	2
	研究生	1	1	2	1
進 学 者 総 数		96	96	80	105

就職先内訳	印　刷	2	2	2	3
	出　版	10	17	12	13
	新　聞	10	10	10	6
	放　送	10	10	13	11
	広　告	9	10	9	4
	通　信	10	12	6	5
	情　報	14	21	28	15
	ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ	2	3	3	5
	金融保険証券	14	32	28	32
	商社流通	2	6	11	15
	建　設	1	1	4	3
	不動産	6	1	1	7
	運　輸	7	9	12	4
	製　造	21	29	33	24
	ｻｰﾋﾞｽ	12	16	17	16
	ガス電力	3	2	3	2
	教　育	12	6	6	7
	官公庁	17	10	11	13
	その他	4	9	3	7
就 職 者 総 数		166	206	212	192

観点　関係者からの評価

（観点に係る状況）

本学部では、2007 年 7 月に、就職先の関係者から卒業生に対する評価や要望等の聞き取り調査を行った（別添資料 10－２：卒業生就職先聞き取り事例、P10－26）。評価内容は総じて極めて良い。専門的能力を歓迎する職場がある一方、非常に多くの採用先が、本学部出身者の知識の広さと深さ、そしてコミュニケーション能力やリーダーシップを発揮する能力を評価している。これらの能力は、企業内での実務的な研修では容易に得られるものではなく、本学部の出身者は就職先からの期待に十二分に応えている（資料 10－26：卒業生就職先聞き取り事例）。なお、卒業生に対してもアンケート調査を行い、本学部の教育内容について事後的にデータを収集した（資料 10－27：卒業生聞き取り事例）。卒業生

に対する調査結果から、幅広い分野にわたる授業科目の受講や演習等での教員との人間的交流によって、文献読解や論文作成等の基本的な方法を身に付けるとともに、幅広く深い知識を獲得していることが窺えた。

（資料 10－26：卒業生就職先聞き取り事例）

聞き取り先：　日本コントロールシステム
日時：　2007 年 8 月 1 日
対象者：　思想文化学科インド哲学仏教学専修課程（平成 18 年度卒業）Kさん
聞き取り相手：　T 氏（同社副社長）

当社は、1981 年に設立した独立系のシステムハウスで、ソフトウェアとハードウェアの両方の開発技術者を擁し、顧客のニーズに沿ったシステムを提供している。半導体設計用のシステムでは国内シェア 100%で、世界シェアもトップクラスのアプリケーションを商品化している。新卒採用は、コンピュータ技術職のみの単一職種採用であるが、選考の評価ポイントは基礎学力と対人能力（コミュニケーション能力）で、入社前のコンピュータの知識や経験は一切問わない。技術は入社後の研修で教育することが比較的容易だが、対人能力はなかなか教えられないという考えが背景にある。Kさんもそのような基準で採用した。現在Kさんは新人研修中で、まだ仕事をしているわけではない。研修には個人単位のものからチーム制のものまであるが、Kさんはチームを取りまとめて、メンバーの力を発揮させる能力に長けている。彼はメンバー間のコミュニケーションを密にするという方法でチームの結束を高めている。この点については新人離れしており、将来実務に就くときを大変楽しみにしている。

聞き取り先：　（株）富士通
日時：　2007 年 7 月 12 日
対象者：　歴史文化学科西洋史学専修課程（平成 17 年度卒業）I さん
聞き取り相手：　Y 氏（同社郵政事業部課長）

当社郵政事業部では、郵便業務の民営化にともなうソリューション開発をおもに担当している。今年10月 1 日からの郵政民営化と 5 社への営業分割という事態にいかに有効に対処するかを、各フィールドにおいて顧客と対話を重ねながら開発の要件を探り出すことに、当事業部の役割がある。Iさんは現在営業部門に勤務し、顧客との対話の前線に立って活動している。当社はシステム製作をはじめパソコンにかかわる業務を柱としているが、入社後は 1 年間のシステム教育を課しているので、理系出身者のみならず、文系出身者でも問題なく業務に適応できる。I さんもこのシステム教育を受けて必要なノウハウを身につけた。文系の西洋史出身者の利点としては、現在は郵政民営化の先例として、欧米の郵便会社を参考にする調査研究もおこなっており、I さんはオランダ・ドイツなどの郵便会社の調査に貢献している。また文系の知識・教養を生かして、顧客とも良好なコミュニケーションを実践している。I さん本人は機敏な理解力もあり、文系出身の上司も多いなかで、的確な連絡をとりながら仕事をしている。文学部への要望はとくにないが、パソコンの基礎やドキュメンテーションの方法など身につけた学生を今後とも送りだしていただきたい。

（資料 10－27：卒業生聞き取り事例）

聞き取り先：　内閣法制局
日時：　2007 年 12 月 20 日
聞き取り相手　文学部思想文化学科哲学専修課程（平成 16 年度卒業）0 さん

東京大学文学部は多彩な学科がそろっているので、さまざまな分野の授業を受けられることが魅力のひとつであると思う。私も専攻の哲学だけでなく、社会学や宗教学、応用倫理といった授業も受けていた。世の中をさまざまな角度から見つめることはとても面白い。

もちろん専攻の哲学でもいろいろなことを学んだ。哲学概論では、地図を描くという譬えで、人間が生きるための諸条件について、その一つひとつが成り立つための前提となる事柄を順序よく漏れなく分析していった。哲学演習では、いくつかの原典を読んだ。原典を精読することの大切さを学んだ。論文やレポートを書く際には、哲学という抽象的な事柄を扱うにあたって、文章が論理的におかしくならないような文の書き方を学んだ。東京大学の哲学の授業は知識よりも、哲学を勉強していくための方法論を教えるものが多かったと思う。

授業の工夫が感じられた点としては、小レポートなどにコメントをつけて返す教員が増えてきたことだ。個人的には、ゼミ以外の授業においてもそのような教員と学生との双方向な機会がもっと増えていけばいいと思う。

最後に、何より刺激を受けたことは、周りの人間が大学院進学志望者、研究者志望者が大半で、勉強に熱心な者が多かったということだ。教師や学生が学問に没頭している雰囲気の中で過ごすことができたのは幸運だった。

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

卒業生は、大学院進学に失敗した者を除き、ほぼ希望に沿った方向に進んでいる。卒業生は、民間企業から官公庁まで幅広い分野に就職している。特筆すべきは、採用数が少ない出版・新聞・放送等の分野にも毎年コンスタントに 10 名以上を送りだしていることであり、これらの業界の期待に十二分に応えている。また、就職先からの聞き取り調査によれば、当初の期待を遙かに上回る活躍をしていると、評価は大変高い。

以上から、卒業生の進路・就職の状況は関係者の期待する水準を大きく上回っていると判断できる。

Ⅲ　質の向上度の判断

①事例１「教育課程の編成」（分析項目Ⅱ）

（質の向上があったと判断する取組）

本学部では、専門分野の枠組みにとらわれない新しい研究と教育の開発を追求している。2007 年度には、旧来の各国語別・縦割りの理念に拠らない「現代文芸論」専修課程を設置した。2007 年度卒業生へのアンケート調査で、「文学部に何か変化があったと思うか」といった質問に対しても、専修課程の増設を挙げた回答が多くあり、学生が歓迎していることが分かる。この専修課程の講義には、他専門分野からも幅広い学生の受講が見られる（資料 10－28：現代文芸論の専修課程別受講者数（2007 年度））。

（資料 10－28：現代文芸論の専修課程別受講者数（2007 年度））

科目番号	科目名	担当教員	哲学	倫理	宗教	美学	イ学	日史	東史	西史	考古	美史	言語	国語	国文	中文
73801	現代文芸論演習	柴　田	0	0	0	5	0	2	1	2	1	0	1	0	3	0
73802	現代文芸論概説	柴　田	2	0	2	2	1	1	0	1	0	2	2	0	3	0
73803	比較文学概論	沼　野	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0
73804	現代文芸論演習	沼　野	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
73805	近代文学特殊講義	Goossen	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
73806	近代語学近代文学演習(Ⅰ)	Goossen	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
73807	近代語学近代文学演習(Ⅱ)	Goossen	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
73808	比較文学概論	Goossen	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0
73809	現代文芸論概説	大　橋	2	2	8	2	0	0	0	4	0	2	1	3	6	0
73810	近代文学特殊講義(Ⅰ)	安　藤	1	0	1	6	1	0	0	0	0	0	0	4	12	0
73811	近代文学特殊講義(Ⅱ)	安　藤	1	0	0	4	0	0	0	0	0	2	0	3	8	0
73812	近代文学特殊講義	塚　本	5	0	2	6	0	3	1	4	1	3	0	1	1	0
73850	比較文学概論	△ 菅 原	2	1	3	0	0	2	1	0	1	3	3	2	7	0
73851	近代語学特殊講義	△佐々木	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	6	2	0	0
73852	現代文芸論概説	△ 高 山	1	2	1	9	0	0	0	2	0	4	0	0	0	0
73853	近代文学特殊講義(Ⅰ)	△ 野 谷	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
73854	近代文学特殊講義(Ⅱ)	△ 野 谷	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
73855	近代語学特殊講義	△金田一	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
73856	近代文学特殊講義	△ 若 島	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1
計			19	5	22	43	5	11	3	14	3	18	18	15	48	1

科目番号	科目名	担当教員	英文	独文	仏文	スラヴ	南欧	現文	西古	心理	社心	社会	人文	他学	他研	合計
73801	現代文芸論演習	柴　田	25	0	5	0	1	8	2	0	3	1	1	10	2	73
73802	現代文芸論概説	柴　田	14	1	0	0	0	6	0	1	0	3	2	4	0	47
73803	比較文学概論	沼　野	5	1	1	2	0	11	0	1	0	0	2	2	0	31
73804	現代文芸論演習	沼　野	8	0	3	1	0	9	0	0	0	1	2	1	1	32
73805	近代文学特殊講義	Goossen	1	0	0	0	0	3	0	0	1	2	0	4	0	13
73806	近代語学近代文学演習（Ⅰ）	Goossen	3	0	0	0	0	7	1	0	0	1	0	5	1	18
73807	近代語学近代文学演習（Ⅱ）	Goossen	4	0	1	0	0	3	0	0	0	2	0	4	0	17
73808	比較文学概論	Goossen	7	1	1	0	0	2	0	0	0	2	1	3	2	23
73809	現代文芸論概説	大　橋	36	1	3	1	0	9	0	1	2	3	2	9	2	99
73810	近代文学特殊講	安　藤	4	1	0	0	0	7	0	1	2	1	0	8	0	49
73811	近代文学特殊講義(Ⅱ)	安　藤	1	1	1	0	1	7	0	1	2	2	0	2	0	36
73812	近代文学特殊講義	塚　本	3	0	20	0	0	3	0	2	0	2	0	3	1	61
73850	比較文学概論	△ 菅 原	12	1	2	0	0	6	0	1	0	2	0	6	1	56
73851	近代語学特殊講義	△佐々木	2	1	1	0	1	7	0	0	1	1	0	10	0	36
73852	現代文芸論概説	△ 高 山	3	1	0	0	0	6	0	0	1	3	0	1	3	37
73853	近代文学特殊講義(Ⅰ)	△ 野 谷	5	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	3	0	21
73854	近代文学特殊講義(Ⅱ)	△ 野 谷	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5
73855	近代語学特殊講義	△金田一	0	1	0	1	0	4	0	1	0	0	1	0	0	12
73856	近代文学特殊講義	△ 若 島	2	2	1	1	0	8	0	0	1	3	0	3	0	28
計			136	12	44	6	3	112	3	9	13	29	11	78	13	694

②事例２「授業改善アンケート等による学生の要望を汲み取る取組」（分析項目Ⅰ．Ⅳ）（質の向上があったと判断する取組）

2005 年に学部生を対象とした全学学生生活実態調査のうち、カリキュラムに関する評価では、本学部学生の 67.6%が「満足」あるいは「まあ満足している」と回答した。2007 年度の卒業生に本学部独自のアンケート調査を行ったところ、81.9%が「本学部での教育に満足している」、16.3%が「どちらともいえない」と回答し、僅か 2.3%が「不満があった」と回答した。また、前期課程から本学部に進学した者のうち、２年で卒業する者の比率は、2004 年度に 57%であったものが、2007 年度は 68%に上昇した。これは、学生に対する授業改善アンケート等を通じて学生の意見や要望を汲み取る努力をしてきたことの成果だと考えることができる。2007 年度の卒業生へのアンケート調査で、「文学部に何か変化があったと思うか」という質問に対して、「面倒見が良くなった」「難しすぎた講義が分かりやすくなった」という回答が複数あった（資料 10－29：2007 年度のアンケートに対する対応の事例（鈴木泉准教授の場合））。

（資料 10－29：2007 年度のアンケートに対する対応の事例（鈴木泉准教授の場合））

授業評価アンケートを受け、次年度は次の二点に留意し、授業の改善をはかった。

- 空調の音によって講義の声が聞こえ辛いという指摘が複数あったので、この点に留意し、講義中には空調の運転を弱めるなどして、講義環境の改善をはかった。
- 授業の進行に関して、シラバスとのずれについて批判的なコメントが寄せられたので、現在進行形の作業を披瀝する講義の場合には、シラバス通りにいかないことがあることを初回の授業において予め述べ、了解を求めるという処置を講じた。